

「青海島鯨墓」

山口県長門市

長門市の沖に浮かぶ青海島の通(かよい)では江戸時代から高度に組織化された古式捕鯨が行われ、捕鯨を生業とする人達が独自の文化を育ててきた。

鯨墓は、向岸寺五世讃誉上人が後進に道を譲って延宝7年(1679)に鯨の胎児の安楽並びに鯨の菩提を弔うために、鯨墓の建立を発願され、13年後の元禄5年(1692)に鯨墓が

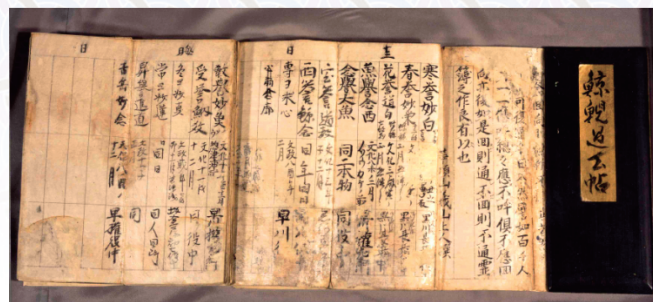
立てられた。墓の正面には大きく「南無阿弥陀仏」と刻まれその下に「業尽有情 雖放不生 故宿人天 同証仏果」と刻まれている。この意味は、「鯨としての生命は母鯨と共に捕らえられたことで終わったが、我々は胎児を捕らえるつもりはなかった。海に放してやりたいが、独りでは生きてゆけないだろう。だから我々人間と共に念仏回向の功德を受け、どうか成仏して欲しい。」との先人達の願いがこめられているという。墓の背後の空き地には72体の鯨の胎児が埋葬されており、鯨墓は、昭和10年に国の史跡に指定された。

墓建設と同時に、鯨の位牌と鯨鯢過去帖がつくられ、供養が始まった。以後、捕鯨が行われなくなった

現在まで、鯨の回向は続けられている。鯨鯢過去帖は、享保4年(1719)から天保8年(1837)までの約120年間にわたって、人間と同様に、鯨に戒名をつけ、種類、捕獲した場所と組名を記録したものである。

また、通の人々が残した鯨唄がある。鯨唄は捕鯨期の納屋作業や宴席で歌われた労働歌であり祝い歌であった。通鯨唄は、鯨に対する感謝の気持ちを表し、鯨の死を心から悼んで、鳴り物は太鼓だけで手は叩かず「揉み手」によって歌われる。鯨組の解散した今では、「鯨唄保存会」によって伝承されている。

長門市くじら資料館(☎0837-28-0756)では、突き捕り式から網捕り式へと捕鯨技術が変化していく様子が見える文献や道具、風習等が展示されている。



鯨鯢過去帖



回向風景

みどころ



- 青海島：きらめくような青い日本海に浮かぶ青海島は周囲約 40 km。国の名勝及び天然記念物に指定される長門市の代表的な景勝地で、断崖絶壁や洞門、数多くの奇岩怪石などが連なる。特に変化に富んだ海岸線の絵画的風景はすばらしい。
- 金子みすゞ記念館：日本童謡の黎明、大正末期に彗星のごとく現れた童謡詩人金子みすゞ。生誕百年の年に当たる平成 15 年 4 月、彼女が幼少期を過ごした金子文英堂跡地に「金子みすゞ記念館」がオープンした。これは、没後五十余年を経て甦った彼女の足跡をたどりその業績を顕彰する記念館であるとともに、地域の人々や全国から訪れるみすゞファンの文化活動・創作活動を支援するための交流拠点でもある。 ☎: 0837-26-5155